

■ 第 6 セッション ■

---

漢族研究からみる北部少数民族の社会と文化



報 告

暁 敏



コメント

伊 藤 亜 人

聶 莉 莉

周 星



自由討論・質疑応答

座 長

森 久 男

コーディネーター

高 明 潔

.....

2006年7月16日

●**座長（森）** — それでは、第6セッションを始めさせていただきたいと思います。

報告していただくのは、中国研究科の博士課程に在学している暁敏くんです。報告のテーマは「文化的変容からみたダフル族」で、暁敏くん自身がダフル族ですので、彼自身の民族意識みたいなものを、今日の報告からとらえることができるのではないかと思います。

まず、私の個人的経験を少しお話させていただきますと、私が生まれて初めてダフル族に会ったのは、1984年にフフホトの内蒙古社会科学院へ行ったときです。そのときに暁敏くんのおじいさんのバタルンガさんに会いまして、これが最初です。90年代に入りまして、ほぼ毎年バタルンガさんのところに通っていましたが、そのとき必ず聞かされるのは、ダフル人というのは独自の民族ではなくて、あくまでもモンゴル族であるということです。

今日、報告してもらう内容としては、新中国ができて民族識別政策が実施されていくなかで、ダフル人がモンゴル族ではなくて、独自の民族であるということが説明されています。

長いあいだ、ダフル人は独自の民族として扱われなかったが、中国共産党の民族政策のなかで、どうしてダフル族が独自の民族として識別されたのか。このあたりについて理解するヒントが、今日の報告から得られるのではないかと思います。

それでは、報告をお願いします。

## ◆第6セッション報告◆

### 文化的変容からみたダフル族

暁 敏

<愛知大学大学院中国研究科博士後期課程>

#### I. はじめに

ダフル族は、中国政府により単一の民族として識別され、今や中国の少数民族の一つになっている。人口は2000年センサスによると132,394人、主に内蒙古、黒龍江、新疆に分布している。漢字では、達斡爾、達呼爾、達古爾、達古日、達瑚爾、打虎兒、打虎力等、ダフル、ダグル、ダゴール、ダウール等の日本語の表記があり、英語ではDaurと記している。鄂温克（エヴェンキ）族、鄂倫春（オロンチョン）族と並んで内蒙古自治区の三少民族と言われている。

従来、伝統的には自らをモンゴルの一部と認識してきたが、中国政府の民族識別工作のもと、言語、文化などの面で、他のモンゴル系諸集団とは諸独自性を有していたことから、モンゴル族とは別個の独立した民族として扱われることになった。したがって、今日のような「ダフル族の多様な文化」を形成した。とはいえ、歴史上モンゴル、満州、エヴェンキ、オロンチョンなどの周辺民族と共存し、文化的にも多様性に富んでおり、それらといくつかの共通性と相違性をもち、とりわけ、言語、文化面ではモンゴルと共通性が多いことは無視できない。報告者自身はダフル族出身であり、高校卒業までモンゴル語による教育を受け、言語、文化等の諸点において、モンゴルとの共通点が多く、モンゴルと如何に近いことを実感してきた。

なお、少数民族と漢族との関係を問題とした議論が多いが、少数民族間の関係を問題視するもの

はそれほど多くない。こうした観点から、ダフル族の多様な文化を把握するには、周辺諸民族とりわけモンゴルとの関係および上述したようなモンゴルとは別の単一民族として識別された経緯などの理解は重要な視点になる。

こうした状況を踏まえつつ、ここでは、ダフル族の文化的な側面に注目しながら、中国政府によってダフル族として識別されたいきさつ、歴史的な背景を中心に分析し、その過程の中に内的および外的な状況と密接に関連していたことを明らかにしたい。

## II. ダフル族の概要および歴史的沿革

ダフル族の2000年における人口は132,394人、主に内蒙古の呼倫貝爾（フルンボイル）、黒龍江の齊齊哈爾（チチハル）および新疆の塔城に集中し、一部が中国の各地に分布し、大きく分散し小範囲で集中居住している（報告資料のパワーポイントの「ダフル族人口の分布表」を参考されたい）。近代において、ダフルモンゴルと呼ばれ、ダフル族と識別される前にモンゴル族に含まれていた。人口の推移は、それぞれ1964年63,694人、1982年94,126人、1990年121,463人である<sup>1</sup>。

ダフル族は独自の言語をもっているが、文字をもっていない。ダフル語はアルタイ語系のモンゴル語族に属し、モンゴルの一部と自認していたため、知識人はまずモンゴル語を学んだ。清朝においては、満州語は内外モンゴルのどこにも属さないダフル族の居住地であるフルンボイルにおける行政用語であったため、満洲語、満洲文字をも身につけた。結果として、ダフル語には独自の文字がなく、全般的に、モンゴル語からの借用語が広範に用いられ、満洲語からの借用語も多い。語彙を大きく分けると、モンゴル語50%、満洲語30%であり、残りの20%にはダフル族独自のあるいは他民族の語彙および由来不明の語彙も若干存在している。中華民国期にモンゴル語およびかつて満洲語が占めていた地位にとって変わった漢語が用いられる状況が続いた。中華人民共和国成立後、ダフル族と識別された後、モンゴル文字、満洲文字、キリル文字、ローマ字のアルファベットを用いたダフル語の表記方式が考案されたが、反右派運動によって挫折し、公式には、漢語を用いるようになり、その結果、ダフル語を母語として身につける者が非常に少なくなり、言語は消滅の危機に直面しているといっても過言ではない。また、方言は布特哈（ブトハ）、チチハル、新疆などの方言があり、居住する生活環境によって海拉爾（ハイラル）地区のダフル族は、モンゴル語と漢語、新疆地区のダフル族は、カザフ語、ウイグル語と漢語を兼用するようになった。生活面では、漁業、牧畜、狩猟、農耕などに従事している。

その歴史的沿革は、17世紀初めに清朝に帰順し、17世紀の半ばまで、現在ロシア領内のゼヤ（ゼーヤ、Zeya）川から中国領内の黒龍江（アムール河）の北岸地域に居住していた。1643年に、帝政ロシアの武装探検隊の中国東北部への侵攻により嫩江流域に移住した。そして、索倫（ソロン）・鄂倫春（オロチョン）・満州族等と雑居するようになり、ソロンと一緒に「ソロン」と呼ばれていた。17世紀の後半から、清朝政府は、北辺防衛を強化し、辺境防衛体制を構築するために、モンゴル地域を内外モンゴルと分けたが、フルンボイル地域はその内外モンゴルのどちらにも編入されなかった。ロシアと隣接しているフルンボイル地域は、地理的に重要な地域であるため、この地域では、満州八旗制度を施し、ブトハ駐防八旗を組織した。その中心は、ダフルとソロンであり、巴爾虎（バルグ）・オロチョン等もその管轄に編入された。この中で、17世紀から18世紀にかけて伊犁（イ

<sup>1</sup> 《中国民族工作年鑑》編輯委員会、『中国民族工作年鑑』、2003年版、784頁

り) 地方を本拠地とするオイラトの主導権を握り、遊牧帝国を築いたジュンガルの乱を平らげるためブトハから移駐されたダフル人は、今の新疆ダフルである。清朝崩壊後、中華民国期にダフルモンゴルと呼ばれあるいは自称していた。そして、中華人民共和国成立後、1950年代から民族識別政策が実施され、黒龍江、内モンゴおよび新疆のダフル人居住地域で調査を行った。1956年に、中華人民共和国政府は、ダフル人を単一民族として認可し、1958年に莫力達瓦(モリンドワ)ダフル族自治旗が成立し現在に至った。

こうした中、清朝時代にフルンボイル地域に居住しているダフル人は、北方諸少数民族の中でも文化教育が高く、清朝政府に重用され、社会と政治舞台にも活躍する人が輩出し、フルンボイル地域の主導的な立場にあった。1911年に辛亥革命が勃発すると、外モンゴルは清朝からの独立を宣言した。これを契機に、翌年の1912年、ダフル人勝福(シェンフ)を中心に、フルンボイル地域の独立を宣言し、外モンゴルのボグド・ハーン政権への合流を求めた運動、1928年における郭道甫(モンゴル名メルセ)等によるフルンボイル青年党の暴動事件、1931年に満州事変の混乱の状況下、郭道甫、徳古来(モンゴル名ジルガラン)等による反軍閥運動といったような一連の政治的運動のいずれもダフル人が周辺諸民族を取り巻くような形で推進した。満州国建国後も、フルンボイル地域に興安東省と興安北省が設置され、ダフル人の凌升(リンシェン)が興安北省長、額勒春(オルチョン)が興安東省長に就任し、地方有力者出身のダフル人の多くが、そのまま日本に従い、満州国の成立にあたっては要職に就任することとなった。そして、日本の敗戦によって満州国崩壊の空白状況の下、1945年8月に、フルンボイルのダフル人とモンゴル人の上層部の人は、ウランバートルに代表団を派遣し、再び外モンゴルとの統合を試みたが、結果として背景にソ連の対中方針があったため実現できなかった。興安嶺西部に位置する旧興安北省の範囲が1945年10月1日にフルンボイル自治省の成立を経て、1946年3月にフルンバイル臨時地方自治政府と改称され、独自の自治の道を歩むことになった。

一方、興安嶺東部の旧興安東省地区では、1946年3月に納文慕仁(ナウンムレン)省(後に盟に改称)が成立し、ダフル人の金耀洲(モンゴル名エルデン)が主席に就任し、その後の5月26日に東蒙古人民自治政府を撤廃して成立した興安省の管轄に入った。ナウンムレン省が興安省に編入された後、フルンボイル臨時地方自治政府をも興安省の管轄下に入れる動きがあったが、結局、フルンボイル臨時地方自治政府に拒否されて挫折した。フルンバイル臨時地方自治政府の承認に巡って、興安省および中国共産党東北局との間に交渉が交わされた。最終的に、同年10月、中国共産党東北局と東北行政委員会は、フルンボイル地方自治政府の成立を承認した。そして、1948年にフルンボイル地方自治政府は、自治を取り消し、1947年5月に成立した内モンゴル自治政府と一緒に統一自治を実行するようになり、フルンボイル盟になった。

このような歴史上のダフル人の政治活動を見ると、必ずしもダフル族を単独な民族として認識して行動したのではなく、むしろ「モンゴル」という前提でその政治運動を進行していた。それから満州国期に、興安東省と興安北省の省長をはじめフルンボイル地域の要職をほとんどダフル人が占めており、あくまでもダフル人がモンゴル人として活動していたことが明らかである。一方、近代において、ダフル族として認められないため、ダフル人がモンゴル人として政治舞台に登場した<sup>2</sup>という議論も存在するが、フルンボイル地域でリード的な存在であり、なおかつ、周辺

<sup>2</sup> 孟志東、『達斡爾族簡史』、『達斡爾族簡史』編写組、内蒙古人民出版社、1986年、4頁および費考通、「関于我国民族的識別問題」、『民族研究文集』、民族出版社、1988年、170頁

諸民族を取り巻く力のあるダフル人にとっては、果たしてその必要があったかどうかという視点も軽視できない。仮に、前述したように単一民族として認められないため他民族として政治舞台に登場する必要があったとしたら、なぜ「ダフルマンジ（満州）」あるいは「ダフルソロン」ではなく、専ら「ダフルモンゴル」だったのかという疑問の存在も否定できない。それゆえ、この説の成立余地は存在するのが難しいものと考えられる。

### Ⅲ. 文化的変容からみたダフル族

上記のように、1912年から二回外モンゴルとの合併を試みたが、結局拒否されたフルンボイルにとって、1948年に、フルンボイル全域が中国初の内蒙古自治区の管轄下に入り、ある意味で念願の統一を実現したと言えよう。しかし、このように、チチハル近郊に住むダフル人たちは、「自治」から取り残され、孤立されたことになった。よって、昔からフルンボイルのダフル人との間に矛盾のあるチチハルのダフル人には、前者に対して新たな不満が生じることになった。なお、フルンボイル地方自治政府成立当時の自治の内容と枠組みは、政治、土地管理などの面において、非常に高度なものだった。1948年に内蒙古自治区に合流した当時にも、フルンボイルの歴史的特殊性、移民および牧地の開墾等の禁止といったような項目を再度強調した<sup>3</sup>。一方、チチハルのダフル人には、こうした「自治の保護」がなかったのが現実だった。

そこで、登場したのは中華人民共和国の誕生によって実施された民族政策と民族識別工作である。中国政府による、国民を構成する諸集団が、いかなる「民族」に帰属するかを確認することである。民族ごとに、その集中居住地域が自治の領域として指定され、その地域において、その民族に対し文字、言語を使用する権利、財産の管理権、区域内での法令の制定権などが認められる。それから、教育、就職などの優遇政策が実施され、ダフル族に対しては、農機具、肥料、農薬などの生産資材の優先的な購入などの特典があった<sup>4</sup>。

これらに対して逸早く反応したのは、前でも述べたようなフルンボイルの自治から切り離されたチチハルのダフル人だった。そして、「ダフル族」として識別される前の段階の1952年に、チチハル龍江省ダフル族自治区が成立し、それに呼応して1954年に、新疆瓜爾本設爾（ゴルバンシェール）ダフル族自治区も成立した。こうした動向は、チチハルのダフル人にとっては、自己利益を守ることと中国の民族政策と合致した形で形成された。もう一つは、1951年10月に誕生した中華人民共和国成立後の初の少数民族自治旗であるオロンチョン自治区の成立は、ダフル族として識別されることと、後のモリンダワダフル族自治旗の成立に大きな刺激材料となった。というのは、人口の少ないオロンチョン族に比較的広い自治区域を与えられたことである（報告資料のパワーポイントの「オロンチョン自治旗の人口面積表」を参考されたい）。このような状況の下、ダフル人は独自の民族として自己利益を追求することになり、よって「脱モンゴル」<sup>5</sup>という意識が高まったと言えよう。

<sup>3</sup> 中共中央統戦部、『民族問題文献匯編一九二一・七～一九四九・九』、中共中央党校出版社、1991年、1322～1323頁および呼倫貝爾盟史志編纂委員会、『呼倫貝爾盟志』、内蒙古文化出版社、2460頁

<sup>4</sup> 若林敬子、「少数民族人口政策」、天児慧、石原享一等編、『岩波現代中国事典』、岩波書店、1999年、527頁

<sup>5</sup> 劉孝鐘（ユ・ヒョジョン）氏は、このような動きを「非モンゴル人性」と議論している。ユ・ヒョジョン、「中国内モンゴルの多民族世界—フルンボイル盟における民族的生活の枠組みと変容」、和光大学モンゴル学術調査団、『変容するモンゴル世界—国境にまたがる民』、新幹社、1999年、169頁。それよりも、モンゴル人との近い関係或いはモンゴルと同源であることを否定するのではなく、それを容認しながらもモンゴルから離脱するという動きを意識し、ここで「脱モンゴル」という言葉を使うことにした。

1956年、全国人民代表大会常務委員会によって少数民族社会歴史調査組が組織され額爾登泰（ダフル族）、朱榮嘎（モンゴル族）、滿都爾因（ダフル族）等によりダフル人の居住地域で調査を行った。同年、中国科学院によって少数民族言語調査隊が組織され巴達榮嘎（ダフル族）と拿木四來（モンゴル族）を中心にダフル人の居住地域で言語の調査を実施した。ダフル族の識別調査において、ハイラル地区は自分たちをモンゴル人であることを主張し、一方、モリンダワ地区では、ダフル人は独自の民族であることを意識し、モリンダワとハイラル両地区の間に意識的な相違が現れた<sup>6</sup>。にもかかわらず、最終的には、1956年に、中国政府は、ダフル族を単一民族として識別し、1958年に、モリンダワダフル族自治旗が成立したのである。

そして、ダフル族は単一民族として識別された後、その族源についての論争が注目されるようになった。前から述べてきたような歴史をもつダフル人は、他の近隣北方諸民族と関係をもち、他民族を影響し影響されてきており、言語、文化、生活習慣にも他民族との共通性が多い。それゆえ、ダフル人の族源を探るには、難しいこともあり多数の説が現れた。モンゴル、契丹、通古斯（ツングース）等の諸説があり、未だに一定したものはないのが現状である。その中でモンゴル源流説と契丹源流説が最も多く、現在では契丹源流説が定着しつつあり、単にモンゴルとの相違点を探り出し、契丹との共通点を強調するような側面の存在が否定できない。

これらを総合し、今日のようなダフル族の文化は、多様性と複合性をもっており、言語と飲食以外には他の民族と区別がつかなく、それに言語も失いつつあることによってアイデンティティも薄れているような複雑な現状を理解するには、ダフル族として識別される前の段階の歴史的、政治的な要素を考慮しなければならない。モンゴルから脱することなく、そのままモンゴル族であることを維持していれば、現在のダフル族の文化的多様性をモンゴル族の一つの地域的特性と位置づけることができるのではなかろうか。したがって、必死に「ダフル族」特有の文化あるいは特徴を探し出す必要もなくなり、言語の消滅、アイデンティティの希薄化などの現状をモンゴルというもっと大きな枠組みの中で直面し、解決策を模索していくことになるだろう。

#### IV. おわりに

フルンボイル地域は、ロシア、中国の二大勢力に挟まれた地域であり、19世紀からは清朝とロシア、20世紀に入ってから、中華民国、ソ連の思惑に加え、満州に侵攻する日本の利害が絡み、中国、ロシアおよび日本が再三衝突した現場となり、独特な地域特性を持っている。歴史上数回にわたる民族自決自治運動が起こり、その中心的な役割を果たしたのは、ダフル人である。しかも、フルンボイル地域でのリード的な存在を發揮し、あくまでもモンゴルに対して強い帰属意識をもって政治運動を行ってきた。

結論から言えば、中国政府の民族政策と民族識別工作がなければ、一部の人の「脱モンゴルの動向」もなく、更に言えば、「ダフル族の誕生」までにも至らなかつたろう。もとより、フルンボイルは地方民族意識が高い地域であり、この地域において主導的な地位にあるダフル人をモンゴルから離して他の小さな「民族」として「識別」することは、中央からの「統治」と「安定」という観点からみても、非常に有効的な手段であり、政策的に支持する必要が十分あったということに

<sup>6</sup> 傅榮煥、「關於達呼爾的民族成分識別問題」、《達爾資料集》編委會、全国少数民族古籍整理研究会編、『達爾資料集』、第二集所収、民族出版社、1998年、415頁

注目しなければならない。また、1948年にフルンボイル地域が夢見て内蒙古自治政府と合流した後の「統一自治」の中身は、当初自分達の望んでいたものと本当に一致したかどうかという疑問の存在を無視してはならない。実際、「統一自治」の内容は、当初よりかなり格下げの形となり、したがって、モンゴルに対する「不信」を招き、最終的に、チチハルダフルの動きの影響を受け、民族識別工作のもと、モンゴルから離れ、独自の民族としてスタートする道を選んだことになった。

最後に、ダフル族は独自の民族として識別されてから、周辺諸民族の様々な特徴を有する複合的な文化を形成したことを理解するには、識別された過程で内外的あるいは政治と歴史的な要素が存在していたことを再認識する必要があることを改めて強調しておきたい。

## 参考文献

### 日本語文献：

- ・ 鳥居龍蔵、『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』、岡書院、大正十三年
- ・ 満州事情案内所編、『満州国の現住民族』、康德五年、1938年
- ・ 興安東省、『興安東省概観』、康德五年、1938年
- ・ 池尻登、『達斡爾族』、満州事情案内所、康德十年、1943年
- ・ 白鳥庫吉、『白鳥庫吉全集』、第四巻、岩波書店、昭和四十五年
- ・ シロゴロフ著、川久保悌郎、田中克己訳、『北方ツングースの社会構成』、岩波書店、1982年
- ・ オーエン・ラティモア、エリノア・ラティモア著、平野義太郎監修、小川修訳、『中国—民族と土地と歴史一』、岩波書店、1965年
- ・ 畑中幸子、「中国東北部における民族誌的複合」、畑中幸子、原山煌編、『東北アジアの歴史と社会』、名古屋大学出版会、1991年
- ・ 加々美光行著、『知られざる祈り・中国の民族問題』、新評論、1992年
- ・ 毛里和子著、『周縁からの中国—民族問題と国家』、東京大学出版会、1998年
- ・ 和光大学モンゴル学術調査団、『変容するモンゴル世界—国境にまたがる民』、新幹社、1999年
- ・ 天児慧、石原享一等編、『岩波現代中国事典』、岩波書店、1999年
- ・ 森久男、『徳王の研究』、創土社、2000年
- ・ 中見立夫、「ナショナリズムからエスノ・ナショナリズム—モンゴル人メルセにとっての国家・地域・民族—」、毛里和子編、『現代中国の構造変動7 中華世界—アイデンティティの再編』、東京大学出版会、2001年
- ・ 宮脇淳子、『モンゴルの歴史』、刀水書房、2002年

### 中国語文献：

- ・ 程廷恒、張家璠纂、『呼倫貝爾志略』
- ・ 郭道甫、『呼倫貝爾問題』、上海大東書局、1931年
- ・ 国家民委民族問題五種叢書編輯委員会、『達斡爾族社会歴史調査』、内蒙古人民出版社、1985年
- ・ 《達斡爾族簡史》編写組、『達斡爾族簡史』、内蒙古人民出版社、1986年
- ・ 孫進己、『東北民族源流』、黒龍江省人民出版社、1987年
- ・ 中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料委員会編、『偽滿興安資料』、内蒙古文史書店、1989年
- ・ 中共中央統戦部、『民族問題文献匯編一九二一・七—一九四九・九』、中共中央党校出版社、1991年
- ・ 内蒙古達斡爾歴史語言文学学会、『達斡爾族研究』、第一～第八輯
- ・ 《達斡爾資料集》編委会、全国少数民族古籍整理研究会編、『達斡爾資料集』、第一、第二、第三集、民族

出版社

- ・ 中国達斡爾族人物録編委会、『中国達斡爾族人物録』、黒龍江省人民出版社、1997年
- ・ 呼倫貝爾盟史志編纂委員会、『呼倫貝爾盟志』、上、中、下、内蒙古文化出版社、1999年

英語文献：

- ・ Kou Tao-fu, “Modern Mongolia”, *Pacific Affairs*, Vol. 3 No. 8. 1930



●**座長(森)** — ただいま暁敏くんから、「文化的変容からみたダフル族」についての報告を聞きました。次にコメンテーターの伊藤先生から、ただいまの報告に対する感想を述べていただきたいと思います。

●**伊藤** — 私は主に韓国社会の研究に関わってきましたが、もともと中国にはたいへん関心がありまして、特に少数民族には学生のときに非常に関心を持っていたのですが、専門ではありません。一番専門でない人が真っ先にコメントをするのもどういうものかと思って、聶さん先にやりなさいと言っただけけれども、決まっているとされていて困惑しております。ダフル族の地域を訪ねたこともないし、初めてのダフル族は暁敏さんで、それも昨日です。

「文化変容」とあるものですから、実態について何か問題点が指摘されるかと思って、その点についてコメントしようと考えていました。しかし、ただいまの報告は主として民族自治が成立する歴史的な経緯と、地域的あるいは外的状況との関連が中心となっていました。私は、まず何よりも現地のネイティブスから直接に話をうかがってたいへん勉強になりました。その中で、ダフル特有ともいえる点がいくつか指摘されています。地域差が大きいという点、そして自治の動きにはすでに自治旗時代からの運動の伝統がありました。しかし、いずれもフルンボイルを中心にした話です。言語には独自の文字はないのですが、モンゴル文字(満州文字)で表記されたものがあります。しかし、教育は漢語・漢文が中心とのこと。そのへんが今ひとつ整理できないのもうすこし説明してください。満州文字でもって子供たちが詩を読んだりする状況が、どこか牧民地区でもあるのかどうか。以前、シリンホト郊外のPainterという所のゲルで、子どもがモンゴル文字で詩をとんとんと読むのを聞いて感動した覚えがあります。そういう状況があるのか、内モンゴルのモンゴル族とはだいぶ違うようにも思えます。確認したいと思います。

次に、牧民地区と農耕地区にまたがってダフルと呼ばれていて、牧民地区では内モンゴルに近い歴史的な運動を経ているので、今でもそうした志向があるようで、そうした地域差は良く分かってきたのですが、その一方でいったい文化変容ということで特に何を指摘したかったのか、その点を確認したいと思います。

先に言ってしまうと、文化変容論というのは実は非常に問題がありまして、何か客観的な文化という指標を取り上げることによって、人々の生活とかアイデンティティとか、いろいろな問題を扱うはずなのです。文化というのは、そういう方法論として設定されたものですが、文化を語ることによって当事者の生活者、あるいは人道的な保障であるとか、いま言うヒューマンセキュリティーとか、もともと生活という概念で語られるべきものが、人間抜きの文化を語ることによって密閉されるような問題が指摘されているわけです。